

タイトル：2022年度 教育セミナー（第18回）

日時：2022年9月15日（木）～18日（日）

ハイブリッド開催

「アフガニスタン（阿）独立後の新疆における阿国籍保有者をめぐると中阿英関係」

松尾 健司（東京大学大学院総合文化研究科）

先生方の講義と学生の発表の詰まった濃密なプログラムに参加させて頂いたことに感謝申し上げます。修士論文にて扱っている新疆を中東やイスラームとのつながりの中で捉える視座を得ることが本セミナーへの参加の動機でした。本セミナーへの参加を通じて、その手がかりを得ることができたばかりでなく、普段自らが触れることのない分野の話をお聞きし、多くの方と交流することもでき、今後につながる体験となりました。

私は自身の研究の発表時間を頂き、1910、20年代の新疆におけるアフガニスタン臣民の法的地位や国籍管理をめぐるとの問題を扱いました。聴衆の皆様にとっては聞き慣れないテーマであるはずにもかかわらず、鋭い質問や貴重なコメントを頂くことができました。同時に、時間に比して内容を詰め込みすぎたきらいがある点を反省しました。今後、修士論文に反映させられるよう頂いた指摘を検討していくとともに、分かりやすい発表を心掛けたいと思います。

先生方の講義はどれも刺激的なものばかりでした。とりわけ印象に残ったのは、中東と他地域のつながりというテーマを扱われた長縄宣博先生と鈴木伸隆先生の講義でした。長縄先生からは自身の扱う地域以外の研究を読む必要性や地域の知識を深めたうえで分野や地域を越境する重要性などをお話し頂き、鈴木先生からはフィリピンのムスリム統治における「中東ネットワーク」という視座をお教え頂きました。ある地域から地域間のつながりを見る際に、どのような角度から切り込むか、何に注意すべきかを教わることができました。

自分自身の研究方法とは非常に異なりながら、それ故に刺激的であったのは竹原新先生の講義でした。竹原先生の講義では自ら現地で昔話等を収集した経験から紡ぎ出される奥深い世界に触れ、ただただ驚嘆するばかりでした。

学生の参加者による発表は多くが自身の研究と分野、地域、時代ともに異なりましたが、興味深いものばかりで、そのような研究テーマがあるのかということも含め、大変勉強になりました。さらに、自身になじみのないテーマ故に、如何に研究内容を理解して質問をするかに苦戦し、その過程で質問の切り口の設定の訓練をすることができました。

私自身、対面での参加であったため、プログラムの休憩時間に先生や学生同士の交流を行うことができました。顔を突き合わせて行う交流自体がコロナ禍のために制限される中、研究面での話に留まらず、様々な話題の交換ができたように感じます。

最後になりますが、コロナ禍の中で、ハイブリッド開催という運営面で煩雑な形で4日間セミナーを開催して下さった、アジア・アフリカ言語文化研究所の関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。